

平成二十四年一月二十八日(土)午後一時開演
於 紀尾井小ホール

重要無形文化財総合指定常磐津節
第三十回記念 演奏会

— 明治の名作より —

主催 常磐津節保存会

▽松廼羽衣(まつのはごろも)

岸沢式政(小林政子)作詞、二世岸沢仲助作曲。
明治三十二年(二八九九)四月、常磐津林中らによつて初演された。羽衣伝説によつたもので、通称「羽衣」とも言うが、「新古演劇十種」内の「羽衣」とは別曲。なお林中と三世井上八千代との提携によつて明治三十五年、井上流京舞に同名の二中節との掛合曲として取り入れられた。

▽岸漣滴常磐松嶋(きしのだまなみときはのまつしき)・松島

河竹其水(のちの黙阿弥)作詞、七世常磐津小文字太夫(林中)と六世岸沢式佐作曲。明治十七年(一

が、「太平記」卷二十三には、湊川で楠正成を自害させた武人となつていて、正成の亡霊に悩まされる。それを脚色したもの。「新歌舞伎十八番」の一。

▽楠公櫻井の訣別(なんこうさくらいのかかれ)・楠公

作詞者不明、二世常磐津文字兵衛作曲。明治四十四年(一九一三)二月初春の新曲として六世常磐津文字太夫が節付をして披露したと伝える。建武三年(一二三六)五月、桜井の駅で楠正成、正行親子が最後の別れをしたことは「太平記」卷十八で知られた。当時の武将たちがその時々々の利害によつて右往左往していた時代に、終始二貫天皇方に味方した正成

八八四)それまで不和であつた常磐津岸沢和解に際して、当時の家元常磐津小文字太夫が東北出身であるところから、それに因んで松島を主題にして和解を祝つた曲。角書にも「睦み語らふ陸奥の名所」とある。曲名にもそれをきかせている。

▽大森彦七(おおもりひこしち)

福地桜痴作詞。はじめ五世尾上菊五郎のために書かれたというが、明治三十年(二八九七)十月、明治座で九世市川团十郎ほかで初演。初め二世岸沢仲助が作曲したものを、上演時に二世常磐津文字兵衛が改作したと伝える。彦七は実在した人が疑問もある

親子は、のち武士道の鑑とたたえられ、明治になって人気が出た。

▽歌徳恵山吹(うたのとくめぐみのやまぶき)・上道灌

河竹黙阿弥作詞、六世岸沢式佐作曲。明治二十年(二八八七)三月新富座初演。「常山紀談」や「雨中問答」などでよく知られた物語。道灌が雨に逢い、養を借りようとしたが賤の女から山吹の枝を出され、その意味がわからず無学の身を知り、のち歌道に励んで歌人となった。上下の内今回は上を演奏。道灌は江戸城を築いたことでも知られる。

(解説)竹内道敬

常磐津節保存会会員 (五十音順)

会 長 常磐津 文字太夫 東京	岸 澤 式 佐	常磐津 初勢太夫	常磐津 都在蔵
名譽顧問 常磐津 英 寿	常磐津 一寿郎	常磐津 文字蔵	
顧問 常磐津 一巴太夫	常磐津 勘寿太夫	常磐津 八重太夫	女流 岸 澤 満 佐子
顧問 常磐津 松尾太夫	常磐津 菊志郎	常磐津 八百二	常磐津 小 清
	常磐津 清若太夫	常磐津 八百八	常磐津 美佐季
	常磐津 駒太夫	常磐津 和佐太夫	常磐津 文字香代
	常磐津 千勢太夫		常磐津 文字孝代
	常磐津 津太夫 関西	常磐津 一佐太夫	常磐津 文字増十
	常磐津 東 蔵	常磐津 小由太夫	

相談役 竹 内 道 敬

問合せ先 常磐津節保存会事務局

〒107 東京都世田谷区岡本1-32-8

TEL 3707-3763

紀尾井ホール

〒107 東京都千代田区紀尾井町6-15

TEL 5276-4500